

# 平成24年度事業報告書

自平成24年4月 1日

至平成25年3月31日

## I. 事業活動の概要

公益財団法人として初めての事業年度に当たり、3つの公益事業「環太平洋学術研究奨励事業」、「北京日本学研究中心との共同事業」、並びに「当財団の事業について普及・啓発・啓蒙を行う事業」について、個々事業の公益性と運営の効率化に留意しつつ、着実に遂行した。また、公益性の一層の充実を図るべく、規程の整備を図った。

### 1. 環太平洋学術研究奨励事業

- |                 |          |           |
|-----------------|----------|-----------|
| [1] 第28回大平正芳記念賞 | 5件と特別賞1件 | クリスタル牌、賞金 |
|                 |          | 550万円     |
| [2] 第26回学術研究助成費 | 1件       | 助成費 100万円 |

平成24年6月12日に上記の授賞式を日本工業倶楽部で行った。

### 2. 北京日本学研究中心との共同事業

2012年11月8日(木) 15:30~19:00

於：北京日本学研究中心 多目的ホール  
燕藍楼飯店

渡邊 昭夫先生(東京大学名誉教授、当財団運営・選定委員会顧問)による、日中国交正常化40周年記念特別講演会、『大平正芳全著作集』収納桐箱贈呈式、「第八回日本語優秀学位論文大会」表彰式、を開催するとともに、センター主催招待会に出席した。

なお、当年度の共同事業については、尖閣諸島をめぐる外交問題の影響により、渡邊先生の講演を除き、日中国交正常化40周年記念事業は行われず、例年事業の実施に留められた。また、このような経緯もあり、当日の中国側出席者は、徐一平センター長を始め、北京日本学研究中心関係者のみであった。

当状況に鑑み、財団としては、当年度の共同事業について実施すべきか、事前に財団内部の中国問題識者数名のご意見を伺ったところ、全員から「事情はあるにせよ、事業は中断しない方がよろしいのでは」とのご意見をいただき、また、渡邊 昭夫先生より、「こういう時だからこそ、北京日本学研究中心の学生に直接語りかけたい」との強い意思表示もあったため、実施することとした経緯があった。

- (1) 渡邊 昭夫先生による、日中国交正常化40周年記念特別講演会  
「中国と日本 1972—2012 両国は今後何と闘うべきか？」をテーマに、「最近の日本語事情」～「中国の古典に学ぶ」～「結語」と講演は進められた。内容については、本報告書7頁～9頁に収録の要旨を参照。

- (2) 『大平正芳全著作集』収納桐箱贈呈式

贈呈式に先立ち、下記3名の方より挨拶が行われた。

- ①当財団を代表して、大平知範評議員  
内容については、本報告書10頁～13頁に収録を参照。
- ②北京日本学研究中心長 徐一平様  
内容については、本報告書14頁～16頁に収録を参照。
- ③国際交流基金北京日本文化センター副所長 高橋 耕一郎様  
内容については、本報告書17頁に収録の要旨を参照。

平成24年6月11日『大平正芳全著作集』最終第7巻の発刊完了を機に、全7巻を一括セットで収納できる桐製の箱ケースを作成し、大平元総理ゆかりの場所10箇所配置し、全著作集の末永い愛読にお役立ていただくこととした。この一環として、北京日本学研究中心にも配置していただくこととし、大平知範評議員より、徐一平センター長に対し贈呈を行った。

(3)「第八回日本語優秀学位論文大会」表彰式

多くの応募者の中から、次の5名に賞状と記念品の授与を行った。

受賞者	研究分野	論文題目
王亜男	日本社会経済	八ッ場ダム開発計画における地元住民の「納得の論理」に関する実証研究
李珊珊	日本文学	芥川龍之介と〈河童〉 —「椒図志異」から小説『河童』に至るまで—
高君	日本語学	日中二字同形語における品詞の相違の類型及び誤用分析
王飛	日本文化	井伊直弼の茶の湯——武士茶湯から「理想武士」の再構築——
李文鑫	日本語教育	日本語専攻の中国人大学生の自己調整学習の一考察—言語学習方略と自己効力感および原因帰属の関連

(3)センター主催による招待会の開催

燕藍楼飯店に会場を移して、北京日本学研究中心主催による招待会が開催された。

3. 当財団の事業について普及・啓発・啓蒙を行う事業

(1) 図書の制作と無償配布を行う事業

大平正芳生誕百年記念事業の一環として、平成24年6月に最終第7巻の発刊を行った(既述)。当財団では、当著作集の一層広範な普及を図るため、ご支援をいただいている59個人・団体並びに、全国190箇所の社会科学系の学部をもつ大学の附属図書館、及び香川県下65箇所の高校・公立図書館に対して全7巻の寄贈を行った。

また、全著作集最終第7巻の発刊完了を機に、全7巻を一括セットで収納できる桐製の箱ケースを作成(既述)するとともに、厚紙製布張箱ケースを作成し、全国50箇所に配置し、全著作集の末永い愛読にお役立ていただくこととした。

(2) 大平正芳記念館運営事業

記念館所蔵の資料について、経年による劣化の防止を図る観点から、国立国会図書館憲政資料室への移管を行うとともに、順次DVD化を図り、現物展示から映像資料提供への移行を実施する事業(獨協大学福永文夫教授の協力により、文部科学省所管の科学研究補助金の資金援助を

得ての事業)について、

①平成24年4月にDVD第1巻、平成25年3月にDVD第2巻の作成が完了し、所蔵資料のDVD化について一応の完成をみた。

②所蔵資料DVD化の一応の完了に伴い、DVD化資料の国立国会図書館憲政資料室への移管について完了した。

なお、当年度累計来館者数は、1,890名(前年度比△21名、月平均158名)であった。

(3)「大平正芳記念財団の事業」パンフレット及び「大平正芳記念財団レポート」発行事業

①「大平正芳記念財団の事業」パンフレットの発行

ア.「大平正芳記念財団の事業」パンフレット

イ.「大平正芳記念財団の事業活動」(平成23年6月から同24年5月まで)リーフレット

②「大平正芳記念財団レポート」第30号の発行

4. 規程整備の対応

平成25年3月12日開催の通常理事会・臨時評議員会の承認を得て、下記規程の策定を行った。

(1)資金運用規程

(2)経理規程

(3)情報公開規程

## II 本年度中の主な庶務事項

### 1. 理事会・評議員会

(1)平成24年5月開催 臨時理事会(決議の省略(書面表決))

- ①平成23年度事業報告書及び収支決算報告書承認の件
- ②評議員会の日時及び場所並びに目的である事項等決定の件

(2)平成24年6月12日開催 通常理事会、定時評議員会

- ①平成23年度事業報告書及び収支決算報告書承認の件(評議員会マター)
- ②評議員1名選任承認の件(評議員会マター)
- ③職務執行報告(理事会マター)

(3)平成25年3月12日開催 通常理事会、臨時評議員会

- ①平成25年度事業計画書及び収支予算書承認の件
- ②資金運用規程承認の件(理事会マター)
- ③経理規程承認の件(理事会マター)
- ④情報公開規程承認の件(理事会マター)
- ⑤重要な財産の譲り受け承認の件(特別決議)
- ⑥資金運用の対象について承認の件(理事会マター)
- ⑦職務執行報告(理事会マター)

### 2. 運営・選定委員会

本年度中に計4回開催し、第29回大平正芳記念賞・第27回学術研究助成費授賞者並びに、第1回鈴木 三樹之助記念・岩手大学大学院奨学金支給対象者を決定した。

### 4. 主務官庁関係事項

平成24年6月18日、外務大臣に対し、平成23年度事業報告書及び収支決算報告書、平成24年度事業計画書及び収支予算書、評議員会議事録写し(平成24年3月27日及び平成24年6月12日)、理事会議事録写し(平成24年3月27日)、及び定款第42条に基づく理事宛書面表決案内及び表決結果写しを提出した。

平成24年7月5日、内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当

室)宛に、登記事項変更(筒井 肇様ご逝去に伴う評議員退任及び尾崎 行昌様の評議員就任)の報告を行った。

平成24年10月4日、内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当室)宛に、登記事項変更(竹中 脩介様ご逝去に伴う評議員退任)の報告を行った。

平成25年2月15日、内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当室)宛に、登記事項変更(長富 祐一郎様ご逝去に伴う評議員退任)の報告を行った。

平成25年3月13日、内閣府公益法人行政担当宛に、平成25年度事業計画書及び収支予算書、評議員会・理事会議事録写し(平成25年3月12日)を提出した。

## 5. 登記事項

評議員に関する事項 4件

日中国交正常化40周年記念 渡邊 昭夫先生講演録(要旨)  
(2012. 11. 8 於・北京)

テーマ：「中国と日本 1972—2012 両国は今後何と闘うべきか？」

○最近の日本語事情

- ・最近日本では、カラオケ、ワープロ、パソコンをはじめ、やたらカタカナ語が氾濫している。
- ・最近ある雑誌が「ネトウヨ＝インターネット右翼」ということばをとりあげ、どこの国でもインターネットに非常に無責任な右翼的な書き込みが多い。こういう風潮こそが国を滅ぼすもとだという趣旨の特集記事を掲載していた。
- ・私の希望はこのことばは定着しない、このネトウヨなんてことばが大手を振って定着し、あたりまえに使われる日は来ないであろうと思いたいが、意外や意外、ネトウヨが根付いてしまって、当たり前のような状態になる日が来ないとも限らない。
- ・個人が発信して個人が受けとることが最近のIT技術の発達によってできるようになり、フェイスブックとかツイッターとか個人対個人のコミュニケーションで情報が急速に広がっていくようなソーシャルメディアが、場合によっては非常に大きな力になる。たとえば、「アラブの春」なんて言われてエジプトでムバラク政権がひっくり返って新しい政権ができる。
- ・ああいう一連の大きな動きの背後にあるのは、「ソーシャルメディア」の力だという風に言われたりする。どんなものでも文明の利器というものはもろ刃の剣で、良く使えば良く使えるし悪く使えば悪く使える、という一つの例がここにも表れているわけでしょう。
- ・今の政治状況を反映して、どうしてもこの種のメディアを通じて流れるメッセージは、所謂右翼的な、あるいは過激というか不健全なものになる傾向がかなり強いということは否定できない。
- ・インターネットで、日本に「甘い」ことを書いたら、あなた方は売国奴だという風に同じ中国人仲間で非難されるのではないのでしょうか。

○中国の古典に学ぶ

- ・話を「中国の古典に学ぶ」へ進めたい。私が中学生の頃は、「漢文」という授業があり、その授業で教わって今でも印象深いのは、「蝸牛角上なにごとをか争う」という文章。かたつむりに小さな角(つの)があつてその角の上で、これはおれの国だと言ってけんかしている。実に馬鹿げたことじゃないかとい

う趣旨の文章、私はそれを10代の子供の時に教室で習って、非常に印象に残っている。後にそれは、「莊子(そうじ)」から採った話だということを知りました。

- ・岩波文庫から『莊子(そうじ)』という本が4冊本になって出ている、その中の「則陽篇」第25節を、金谷先生が現代の日本語に翻訳したものがあるので、それをご一緒に読んでみましょう。

- ・魏国の王様の家来の恵子が賢者である戴普人を王様に薦めてお目通りをさせた。戴普人曰く、「カタツムリというものがありますが、王様、ご存じでしょうか」、

王様が知っているかと答えると、その賢者は、

「カタツムリの左の角(ツノ)に国を構えるものがいて、蝕氏と言います。また、カタツムリの右の角(ツノ)に国を構える者がいて蝨氏と言います。ある時この2国が互いに土地を争って戦争を始める。戦場に転がる屍は数万人、逃げる者を追いかけて半月もしてやっと帰って来たということです。」

王曰く、あー、それは作りごとだなと。

「王様、四方上下の宇宙の広がりをお考えになってみて、行きどまりの果てというものが思われるでしょうか。」

王曰く、いや、宇宙は無限に広がっていると。

「では、その無限の広がりの中に心を放って、自由に遊ぶことをわきまえながら、ひるがえって、人のゆき着けるこの地上の国々を眺めると、それこそあるかないかわからないほどのちっぽけなものではないでしょうか。宇宙から見たこの地球というものは実にちっぽけですね。」

王曰く、その通りだと。

「そういう人のゆき着ける、ちっぽけな範囲の国の中に魏の国がある。あなたの治めている魏の国がある。その魏の国の中に大梁という都がある。その大梁という都の中にあなた、王様がいる。王様はあのかたつむりの角の上の蝨氏とはたしてどう違いがあるでしょうか。」

王曰く、違いがないと。

客人の戴普人が退室すると、王様はなにか大切なものを失ったような有様であった。恵氏が王様にお目通りをすると、王曰く、客人は大人(たいじん)、偉大な人物だ。聖人の堯舜でも彼にはかなわないだろうと。

#### ○結語

- ・私が今日申し上げたいのは、莊子の生きた時代、つまり千何百年前、今言ったようなものの見方をできる人は極めて数少なかつたに違いない。聖人といわれた堯舜さえ顔色なかつた。では、21世紀に生きている我々はいったい

どうなのだろうか。

- 我々は私みたいな凡人でさえ今やグローバルの時代、「全球」時代である、というように誰もが気軽に言うようになった。しかし、実態はどうだというと、とても昔の賢人には及ばない。そこまでいかないにしても、せめてナショナリズムという「強敵」に負けないようにお互いに努力しようではないか。
- 日本、中国の共通の敵はこのナショナリズムである。この「強敵」は、ますますインターネットとか、様々なソーシャルメディアを通じて力を伸ばすだけの条件を得てきている。これに対してどう戦うか？というのが我々が共通に抱えている問題だろう。
- このことを(見)誤ると、始めに述べた雑誌が取り上げている亡国論の議論そのまま、日本は滅びます。中国も滅びます。どちらも滅びます。日本と中国がつぶれればアメリカもつぶれます。他のヨーロッパもつぶれます。それこそまさに「全球」時代。こういうことが私の言いたいことです。我々が、いろいろな問題、ちいさな問題と思っても実はグローバル、「全球」的な意味を持っている問題だ。という風につねに考えて議論しなくてはいけない。
- ここでケネス・ボールドィングという人が書いた、「紛争の一般理論」の本で言っていることを紹介したい。昔は unconditional survival (「無条件生存可能性」) ということがあり得た。敵の攻撃力が及ばないところにまで距離を置いて絶対安全圏を作り、ここにいれば無条件に生き延びられるという前提で、そういう条件をどうやって作るかということで防衛手段を考えた。
- しかし、今や地球どこにいても相手のミサイルが届く、というミサイル時代になったので、それはできない。あくまで、conditional な条件付きの生存可能性しか今や我々は手にできない。
- どういう条件かというとお互いの好意(敵意がないという状態)に依存する。相手を皆殺しにはしないという程度の少なくともその程度の「好意」というか「良識」を相手を持っているかどうかに関わらず自分が生き延びられるかどうかがかかっている。というのが、ケネス・ボールドィングが「紛争の一般理論」で引き出している結論です。
- 私の国際政治学の知見の一端を披露して、今日一番話したかった、「全球」時代の意味をどうとるか？ということの一つのわかりやすい例だろうと思って、「莊子」を改めて読んでみました。我々はその意味を深く考えなければならぬのではないのでしょうか？

大平正芳記念財団代表 大平 知範 挨拶

(2012. 11. 8 於・北京)

ただ今ご紹介いただきました、大平正芳記念財団の大平 知範でございます。財団を代表して一言ご挨拶申し上げます。

本日は、北京日本文化研究センター高橋 耕一郎様のご臨席をいただきまして、ご挨拶を申し上げる機会を賜りましたことを、誠に光栄に存じます。徐一平センター長をはじめ北京日本学研究センターの関係者の方々にも厚く御礼申し上げます。

さて、本年は日中国交正常化40周年の記念すべき年であります。この正常化に先立ち、周恩来総理は、我が国の高碓達之助、古井喜実といった、貴国を良く識(し)り、我が国を非公式に代表していた人たちと、両国間の懸案を詰められました。

それでも本交渉はもめにもめて最後は毛沢東主席が、「もうけんかは済みましたか?」と、周恩来・田中角栄両総理に問いかけたぐらいの厳しいものでした。

祖父・大平正芳は、帰国後の年末に、日中交渉を振り返って次のように書き記(し)る)しています。

- ①日本と中国とは、近いようで遠い国である。それは「大晦日」と「元旦」の関係にもたとえられるであろうか。  
なるほど、共通の表意文字(ひょういもじ)を持つてはいるが、日本語と中国語の構造は全く違う。お互いに皮膚の色は黄色で、髪の毛は黒いが、住居や衣服、風俗、習慣、さらには食生活にいたるまで、大きく相違している。違っているのは、目に見えるものばかりではない。宗教や文学、政治や経済、制度や教育等も違っている。つまり、文化の捉え方や考え方、さらには人間の生き方万般に対する、対処の仕方が非常に違っているのである。
- ②日中両国は、古くから一衣帯水(いちいたいすい)の隣国であり、未来永劫(みらいえいごう)にそうである。好むと好まざるとに拘らず、相互に分別をもって、平和なつき合いをしなければならない間柄である。ところが、日中両国民の間には共通点よりは相違点が多く、相互の理解は想像以上に難しい。しかし、お互いに隣国として永久につき合わなければならない以上、よほどの努力と忍耐が双方に求められるのは当然である。
- ③国と国とのつき合いには、当然ルールというものが必要だ。マナーというものも要る。あたかもゲームにルールと、フェアプレイの精神が必要であ

り、それらを守ることによって初めてゲームが成り立つように、国と国とのつき合いにも、ルールとマナーがなければ成り立たないものである。国際法とか国際慣行とかいうものが生まれたのも、そうしたことが必要であり、また、それを支え尊重しようとする精神があったからに違いない。そして、その基本には、相互に主権の尊重、約束の誠実な履行、平和と互恵と共存を求める精神がなければならない。

日中両国の間柄もそのようなものとして、このルールと精神はお互いに大切にしなければならないものである。その軌道から外(はず)れると両国の関係は壊れ、この軌道の上を歩いている限り、両国の関係は維持されていくのである。そのいずれかが驕慢(ごうまん)であるときは、両国の関係はうまくいかなかった。そのいずれかが相手に対する理解と尊敬の念を失ったときは、両国の関係は、かならずといってもいいほどまずかったのである。

「風塵雑俎より」

国民性が違ってくれば違うほど、お互いのことを知るべく勉強し、努力を重ねなければなりません。

祖父は、1979年12月の3度目の訪中で、日中文化交流協定を締結した後、北京の政協礼堂で行った講演で、相互理解の手段に関し、「国民間の相互理解の増進を図る一つの有力な手段が言語であることはいまさら申すまでもありません」と述べております。

この講演の中でお約束した「中国における日本語学習の一層の振興のための具体的な計画が、「日本語研修センター」であり、いわゆる「大平班」もしくは「大平学校」と呼称されるようになり、1985年にその任務を終え、その後「北京日本学研究中心」として発展的に新発足したいきさつについては、すでにご案内の通りと存じます。

大平学校・北京日本学研究中心を通じて、すでに1,600名を超える卒業生が巣立っておられると聞いております。その卒業生さらにはその教え子を含む方々の国内外重要部門におけるご活躍、各種シンポジウムの開催、出版事業等を通じて、日本学研究中心は、いまや中国における日本学研究中心の「センター・オブ・センター」の役割を十分果たしておられると認識しております。

そして、中国国内の高等教育機関で学ぶ日本語学習者数は世界第2位、日本語専攻がおかれている大学の数は全大学の約半数を占めていると聞いております。

日中国交正常化から40年が経過し、両国の経済は切っても切れない関係にあります。また、両国間の人材交流、文化・芸術面における交流は40年前と

は比べものにならない規模に達しておりますことは紛れもない事実であります。

このように、この40年の間、関係各位のご努力によりまして、日中両国相互理解の下地は間違いなく、確実に整いつつあると思うのであります。

私ども大平正芳記念財団といたしましては、今後とも、中国における日本学の中核機関である、北京日本学研究中心との共同事業を着実に遂行して行くことにより、祖父が抱いた情熱をしっかりと受け継いで参ることをお約束させていただきます。

(『大平正芳全著作集』収納桐箱贈呈式)

さて、前置きが長くなりましたが、『大平正芳全著作集』発刊事業につきましては、祖父が、生前、多くの原稿・文書・スピーチ集を遺しましたことから、その集大成として、一昨年、祖父の生誕百年記念事業の一環として『大平正芳全著作集』全7巻の発刊事業を開始いたしました。

一昨年3月12日に第一巻発刊以来、ほぼ4ヶ月に1巻のペースで発刊して参りましたが、本年6月11日に最終第七巻を発刊することができました。そして、最終第七巻発刊を機に、この『大平正芳全著作集』を折に触れて末永くご愛読いただくために、収納桐箱を製作いたしました。

本日は、最終第七巻とともに、当桐箱を贈呈させていただきます。

昨年もこの席でお話しいたしましたが、この全集には、生前の大平正芳の全著作・論文と新聞、雑誌等での対談・座談会・インタビュー等をすべて網羅・収録しておりまして、いわば大平哲学の神髄を知るための決定版と言えるものであります。

多くの方がこの全集をお手にとってご覧いただければ、天国の祖父もさぞかし喜んでくれるものと存じます。

(日本語優秀学位論文表彰式)

「日本語優秀学位論文賞」は、ただ今お話しいたしました、北京日本学研究中心の前身であります、「日本語研修センター」、通称「大平学校」の創立25周年を記念いたしますとともに、「北京日本学研究中心」創立20周年を記念して設けられ、今年で八回目となります。

今回を含めこれまで合計45の優秀な「日本語学位論文」に対し、賞を授与し、表彰してまいりました。

今年も優秀な成績を収められた5名の方が表彰されます。昨年の表彰式におきまして、鐘美孫(ショウビソン)副学長殿より、「日本語優秀学位論文表彰事業は、研究に取り組んでいる学生に明確な方向を示しており、非常に大きな意義をもっている」との有難いお言葉をいただきました。

この「日本語優秀学位論文賞」に今後も多くの学生の皆さんが参加され、貴センターと財団の共同事業としてますます発展されることを期待しております。

以上をもちまして、『大平正芳全著作集』収納桐箱贈呈式並びに日本語優秀学位論文表彰式のご挨拶とさせていただきます。有難うございました。

以上

北京日本学研究中心 徐一平センター長 挨拶  
(2012. 11. 8 於・北京)

尊敬する大平正芳記念財団大平知範様  
渡邊昭夫先生  
北京日本文化センター高橋耕一郎副所長  
学生の皆さん  
こんにちは

この度北京日本学研究中心と大平正芳記念財団共同主催による「2012 年度日本学研究優秀論文表彰式と『大平正芳全著作集』寄贈式」が北京日本学研究中心で行われたことに対し、北京日本学研究中心を代表して、心からお喜びとお祝いを申し上げたいと思います。そして、本日遙々と日本から来られた大平正芳記念財団の皆様に対して、心から歓迎の意を申し上げたいと思います。

今年は、中日国交正常化 40 周年の年に当たります。孔子様が曰く「三十二にして立つ、四十にして惑わず」ですが、しかし、最近の中国と日本の関係をみると、「惑わず」どころか、われわれ日本を研究する者にとっても、いろいろと惑わされていることがたびたび発生されているのが現状であります。中日両国は、一衣帯水の隣国であり、2000 年以上の友好交流の歴史を持っております。近代以降、両国人民にとっても悲惨な一時がありましたが、中国の故周恩来総理に「二千年の友好と五十年の不幸」と総括されました。1972 年、中日国交正常化されて以来、中日両国はお互いに中日友好、戦略的互惠関係を築きあげるために、多くの方々が刻苦奮闘して、ここ 40 年来、様々な分野で大きな進展が見られました。

政治的には、両国の間に四つの政治文書が交わされ、両国間の平和、友好、協力関係を築くという基本精神を確定し、相互の戦略的互惠関係を推進するという方向付けがされております。経済的には、双方の貿易額が 3400 億ドル余りに達し、お互いに最大な貿易パートナーになっております。人的交流面においては、一年の人的往来が 500 万人を突破し、毎日の航空便の往復は 100 便もあり、1 日だけでも 1 万 8 千人の人が中日間で行き来していることとなります。このような関係は、40 年前中日国交正常化された当初では、想像もできないものになっております。そして、このような関係の発展こそが平和、友好、協力関係を求める国際交流の大きな潮流にかなっているのだらうと思われまます。

しかし、最近中日間の島をめぐる問題は、中日の友好関係を妨げる段階に発展しているものになっております。もちろん、国と国同士の関係は、様々な利害

関係が絡み合い、すべての面において、あるいはどんな時にでも友好、協力の関係ばかりが維持されているとは限りません。大事なのは、そのような問題が発生した時に、何を大局とみなし、何を小異とみなすかということだと思います。中日国交正常化する時に、周恩来総理が「大同を求め、小異を存する」と唱え、田中角栄首相の賛同も得られて、国交正常化が実現されました。中日平和友好条約が締結される時に、鄧小平氏が釣魚島問題について「棚上げ論」を提出し、平和友好条約の早期締結が促されました。鄧小平氏が言う将来の人はきっと我々より賢いだろうということは、私の理解としては、友好条約が結ばれた中日両国人民は、きっとより相互信頼のできる友好関係が構築され、そのような信頼関係が成立した暁には、きっとお互いに納得のできる解決方法が見つかるに違いないと意味していると思います。中日国交正常化して40年、中日平和友好条約が締結されて34年もたっている今日においても、おそらくまだ中日友好のために努力された諸先輩たちが期待されているような相互信頼関係が築き上げられていないかもしれませんが、釣魚島（日本称尖閣諸島）をめぐる問題として、いまだに双方の納得のいくような案が達成されていないということは正にそれを物語っているかもしれません。そのような状況に直面したとき、われわれは我々の先輩より賢い解決策が見つからない場合には、少なくともそれより愚かなまねをやめたほうが最も理性的なやり方ではないかと思いません。

ただいま、大平知範様ご紹介したように、北京日本学研究中心は、1979年大平正芳首相が中国を訪問し、中国政府との間に結ばれた「文化交流協定」に基づいて成立した「中国大学日本語教師研修班」から発展継続された研究教育機構であります。当時、大平正芳首相は、中国政治協商会議の大会堂で講演をされたときに、以下のようなことを述べられました。

国と国との関係において最も大切なのは、国民の心と心の間に結ばれた強固な信頼であります。この信頼を裏打ちするものは、何よりも相互の国民の間の理解でなければなりません。

しかしながら、相手を知る努力は、決して容易な業ではないのであります。日中両国は一衣帯水にして二千年の歴史的、文化的つながりがありますが、このことのみをもって、両国民が十分な努力なくして理解し会えると安易に考えることはきわめて危険なことではないかと思えます。

ものの考え方、人間の生き方、物事に対する対処の仕方に日本人と中国人の間には明らかに大きな違いがあるように見受けられます。

我々は、このことをしっかり認識しておかなければなりません。体制も違い流儀も異なる日中両国の間においては、尚更このような自覚的努力が厳しく求められるのであります。このことを忘れ、一時的なムードや情緒

的な親近感、更には、経済的の利害、打算のみの上に日中関係の諸局面を築き上げようとするならば、それは所詮砂上の楼閣に似たはかなく、脆弱なものに終わるのであります。

以上のような相互理解の努力を通じて、世界の平和とアジアの安定の創造に寄与する日中両国の関係をより深くより広く推し進めていくことこそ、今日、両国民に課せられた最も大きな課題であると信ずるものであります。

この講演は、30年以上も前に行われたものですが、今から聞いても非常に貴重で、心が打たれるお話だと思えます。中日両国はアジアで隣り合っている、引越しのできない隣国であります。両国の関係は持ちつ持たれつの関係であり、協力し合えばともに繁栄し、戦えばともに傷つける関係になっております。しかも、この関係は既に両国間の関係を超えて、アジアの安定ひいては世界の平和に影響を及ぼす関係になっております。両国の根本的な利益、アジアの安定ひいては世界の平和を望む中日両国人民も、このような友好関係を妨げるようなことは断じて許すことができないと思えます。

日本のことわざに「初心忘るべからず」という言葉がありますが、四十にしてもまだ惑うのであれば、われわれは初心に立ち戻って冷静に考える必要があるのではないのでしょうか。中日国交正常化の初心、中日平和友好条約締結の初心、中日戦略的な互惠関係構築の初心に帰って、初めてどんなことをすれば中日両国人民の利益にかなうものなのか、どんなことをすれば本当にアジアの安定に貢献できるのか、どんなことをすれば本当に世界の平和に寄与できるのかが分かるのでしょうか。中日両国が政治的に相互信頼、経済的に相互補完、文化的に相互交流のような本当の互惠関係が実現されることこそ、中日両国人民の幸せであり、世界のあらゆる平和を愛する人民の願望でありましょう。

北京日本学研究中心と大平正芳記念財団との交流を深め、若者の日本学研究成果を奨励するのは、まさに大平正芳先生の遺志を受け継いで、中日友好のために人材を育成することのためだと考えております。そして、本日『大平正芳全著作集』の寄贈をいただきました。私たちは必ずや大平正芳先生の著書を勉強させていただき、大平正芳先生の思想、外交観などを研究し、中国の日本学研究成果の発展に寄与するよう頑張っていきたいと考えております。

最後になりますが、われわれの交流と努力によって、少しでも中日双方の相互理解を促すことができればと願いつつ、私の挨拶といたします。

有難うございました。

国際交流基金北京日本文化センター副所長 高橋 耕一郎様 ご挨拶(要旨)  
(2012. 11. 8 於・北京)

この北京日本学研究中心は、発足時より、大平正芳元首相と大変深い縁を持っている。

1979年12月に中国を訪問した大平元首相は、当時の華国鋒主席との合意事項の一つとして、日中両国の相互理解のため、中国の日本語教育に対し協力することを約束した。

その一環として、1980年9月に当時の北京語言学院に、日本語研修センターが設置された。このセンターは、通称として大平学校と呼ばれ、多くの日本教育関係者に親しまれることになる。

そしてこの後、1985年には、この研修班は現在のように、修士学位の授与資格を持つ、現在の北京日本学研究中心になったという歴史を持っている。

このセンターの発足の経緯から、大平正芳元首相は、このセンターの成り立ちを語る上で欠かせない存在であり、また、後に縁あって大平正芳記念財団様による多大なご支援を頂戴していることは、このセンターの教育研究活動において、この上なくありがたいことだと感じている。

私たち国際交流基金もそのような皆様の活動をサポートするべく、出来る限りの努力をしていきたいと考えている。